



—出身は飯能市ですか？

いえ違うんです。東京の港区なんです。

—えっ！ そうだったんですか。意外な……

小学校3年生のときに飯能に越したんです。

—それはご家族が田舎で暮らしたいということ？

ぼくと弟が肺が強くなかったので、空気の良いところに引っ越そうと。

—港区って人が住むところなんですね。

(笑) 広尾の天現寺ってところなんですけど、お寺の敷地内にある築60年くらいの親戚が建てた家を借りていたんです。

—そこから飯能では、ずいぶん田舎へ。

ぼくはまだそこまで都会に住んでいた認識はなかったんですけど、兄は、こんな田舎いやだ、みたいな状態になっていたようです。

—埼玉のなかでも、けっこう……

まあ西の方というか。

—でも川はあるし、自然豊かな良い場所ですよ。

それで、ご両親が作家さんで。

母は和紙の作家。父は美大の彫刻科出身で彫刻も作っていたんですけど、仕事は造形屋で。

—この所沢のアトリエが仕事場だった。

ここは初代の仕事場で、それからちょっとずつ場所を変えていったのかな。

### 一人になって考えた末に、 絵を描きたいという覚悟を決めた

—兄弟も自然にモノを作るようになっていった？

特に兄は美大に行ったので、それでぼくも美大に行って。弟は、俺はもういいかなって感じで違う仕事をしていますけど。

—お兄さんの影響も大きかった？

父も母もモノを作っていて、小さいときに父母の作品とっしょに写っている写真もあるし、影響はあるんでしょうけど、ぼくはなるべく影響のない

ところで、自分自身の進路を決めたかったんですよ。一人になって考えた末に、絵を描いていこうと決めたくもりではあるんです。

—それはいつ頃ですか？

高校を卒業したときくらいです。

—卒業をしてから？

卒業をして、半年フリーターやって、半年バックパッカーしてたんです。一人になりたいと思って。両親とか兄の影響下から抜けたかったの。

—どのあたりに行ったんですか？

ええと……香港からネパール。

—なんか『深夜特急』だ。

そうそう。『深夜特急』と、藤原新也の『メモリー』を担任の先生に渡されて、お前はこれを読めと。その通りに行った(笑)。

—バスに乗って？

全部陸路で。タイからインドまでは飛行機で行ったのかな。ネパールまで行って、本当はもうちょっと行きたかったんだけど、「9.11」があって。

—ということは、2001年。

それでインドからパキスタンが行けなくなって、そこまでだった。そこで、一人で……4月が近づいてきて、来年どうしよう。このままずっと続けるのもあれだなと。

—冬に行ったんですね。

4月から8月までバイトして、お金を貯めて。9月くらいから3月まで。

—まわりに日本人はいなかった。

いや、いっぱいいましたね。『地球の歩き方』し



か持ってなかったの、だいたい日本人がいて。このまま旅行を続けても面白くないな、ろくな人間にならなそうだな、と思って。日本でお金貯めて、こっで豪遊して、みたいなことを繰り返している人たちがいて。

—すごわかる(笑)。その頃はそうでしたよね。

ぼくは18とか19で、20代後半のそういう人たちを見て、これはつまんないなと思って、日本に帰って何かしよう。絵はもともと好きだったので、絵を描きたいという覚悟を決めて帰ってきて。どうせやるなら同世代で絵を描きたいという人が集まっているところは絶対面白いだろうなと思ったので、

大学を選択肢に入れて。帰ってきたら結局5月くらいになっちゃったんですけど、そこから予備校に行き、大学受験。だから実質3浪の年です。

—でも、現役と1浪のときは受験してないんで、2浪で1回落ちて、2回目で合格した。

—なるほど。それで東京藝大に入った。

親や兄の影響下から抜けたかったんですね、とにかく。それで高校のときに大学行こうって言うのがなんか口惜しいというか。

—行くか行かないかということも考えたんですね。まあ、影響は受けているんでしょうけど。

—最初から油絵だったんですね。それは父が彫刻だったから。立体も好きだったんですけど、そのまま彫刻はさすがに同じ過ぎて、つまらないと思って。

—美大へ行くということを決めても、受験という競争はありますよね。

予備校で習うデッサンの基礎は、ぼくには新鮮で。それまで絵は好きと言っても自己流で描いていたんですけど、それを理論立てて描けるようになっていくから、1年目は楽しくて。こういう仕組みなんだ、と。

—仕組みがわかっていった。

しかも落ちたことないし、受かる気満々で(笑)。

—ポジティブだった(笑)。

そうしたら全部落ちて、結構挫折して。でも、やっぱり予備校と大学の環境は違うだろうなと思って。同世代でどういう人が集まるかっていうことが一番の動機だったので。予備校にも面白いやつはいっぱいたんですけど、これで終わりにしたくないから、もう1年がんばろうと。本格的に基礎から徹底的にやろうと思って、予備校の先生にもっとうまくないって言ったらいいんですけど、それで石膏デッサンからやりなおして。

—やはり石膏デッサンですか。

1年目はなぜか石膏デッサンを描いてなかったんですよ。2年目は石膏デッサンを結構やって。そのおかげで無意識というか、頭で考えなくていくらい自分のなかで消化された感じがあるので、受験絵画、デッサンの基礎は、今はあって良かったかなと思います。大学に入ると、逆にそういうことは何も教えてくれないので。

—何かを描きたいという動機はあったんですか？

うーん、何でしょうね……もともと描くのが好きだったのと、結構シャイな子どもで。これはよく親に言われるんですけど、幼稚園のとき、兄は活発



な子どもだったんですけど、ぼくはでっかい紙があっても端の方にちょっとしか描かない子だったんですよ。でも小学校3年で引っ越したときに絵画教室に行って油絵を描かせてもらって、そのときに、何も言わなくとも、黙々と自分の見たことをモノにできるんだという感動があった気がして。

—今でも割と口は重い方ですよ。

まあ、そうなんですけど。だから、しゃべんなくてもいいなって(笑)。

—でも、すごくいろんなことは考えていますよね。

そうですね。それから、ずっと絵は好きで描いている感じかな。

—作家ということも意識していた。

絵を描くってバックバック旅行で決めたときは、そこまで考えていないですね。絵を描いて生きていくんだという覚悟だったと思うんです。あと、高校のときくらいから、美術館に行くようになっていて。

—遠いのにな(笑)。

遠いけど(笑)。西洋美術館とか、近代美術館とか。高校の美術研究室に出入りしていたときに、たまに無料券があって、それをもたらって。

—美術部ではなかった？

美術部ではないんですけど、美術の先生と仲が良くて、休み時間に遊びに行ったり、無料券があることを知って、面白そうな展覧会には行って。

—どんな作家を観ていたんですか。

行くとっても3、4回行っただけですけど。モネとか西洋美術館の名画を観て。あと画集でゴッホとか好きだったんですよ、ムチムチムチ、そのときからモデリングが好きなので。実際に絵を観たときに、やっぱりきれいで感動して、これ描けるようになりたいな、と。

—絵具を盛り上げる好みは今も生きていますね。でも美大へ行くと、モネやゴッホじゃないですよ。

大学の3年くらいまでは、予備校絵画の影響が抜けなくて、批判されていました。それが抜けてきたのは大学院に入ったくらいかな。



惑星としての土／復興としての土1 2023年 油彩、キャンバス 1940×1620mm

## 「絵画」と「生き延びる」という言葉を同じ意味として定義した

—加茂さんの絵を初めて観たとき、ちょっときれすぎる、と思った(笑)。

よく言われますね(笑)。でも、だいぶきれいさがとれてきたんじゃないですか。

—隠しきれないきれいさは残っていますね。

ははは。ビビットな光の感じはずっとある。

—水俣でも福島でも、何を描いても光はずっとありますね。あと、かたちも崩さないのが特徴かな。きっちり仕上げる(笑)。

それも昔からですね。

—それでも大学院の頃からだんだん変わってきた。

大学院から、メディアとしての絵画の可能性を考えはじめたんです。自分と絵画だけじゃなくて、絵画が社会的にどういうポジションにあるべきなのかと。それで卒業した次の年に震災があって、それまでの仕事ができなくなって。もっと自分と絵画と社会がイコールになるような絵を描いていきたいと思って、「絵画」と「生き延びる」という言葉を自分のなかで同じ意味として定義した。

—それから雪山の絵を描いた。

そのときの展覧会は、まず自画像があって、飯能の森からはじまって、趣味の登山になって、被災地になって、都会のビルで、最後に雪山が出てきた。でも、このときは、なぜ雪山なのかはあんまり覚えていなくて。

一究極の場所という意味ではないんですか。

—そういうことだったんですけど、モチーフを集めているときに、ぽーんと雪山が出てきて。登山の絵を描いていて、それを究極的に集約した感じで。このときの展示の準備は忙し過ぎて、ひとつの展覧会のために油絵だけで50枚以上描いて、精神的にも追い詰められていたときに、それが出てきた。そこからですね、今の絵画につながるの。—自分のまわりの環境から、歴史的な方向へ行くようになったのは？

—いや、広島とか水俣は、福島を考えるための歴史的な参照として、そのときどうだったのか、いまそのことをどうとらえているかを学ぶため。

—広島の「原爆の絵」を模写するきっかけは？

—広島芸術センターという友だちがやっているギャラリーで展示の話があって。広島に滞在してリサーチしているときに、広島市現代美術館の「ライフ=ワーク」展で「原爆の絵」を観て、なんだこの絵はって思って。

—あの展覧会は、市民が描いた「原爆の絵」が初めて美術館で展示されたんだよね。それまで平和祈念資料館では展示されていたけど。

—タイミングが良かったと思って。美術館で絵だけに集中して出会えたので。

—ぼくが加茂さんを知ったのも広島芸術センターの展示を観た知人に紹介されて。そのあと、すぐに訪ねてきてくれた。そのときもう水俣へ行っていた？

—まだ水俣へ行く前で、そのあと、福島の帰宅困難区域を描いた個展に来てくれたんですよね。そのとき、今度水俣に行くんですけど言って。

—そうでした。それで丸木美術館で個展をやったときには、広島、水俣、福島という展示になって。

—広島も、水俣というか津奈木も、偶然というか、行きたいと思って行ったというよりは、そこへ行くことが勝手に決まって。津奈木の滞在制作も、別に水俣をやる必要はまったくなくて。

—でも津奈木に行ったら、水俣をやりたくなった。

—いや、行く前から、もう……

—津奈木はどれくらい行ってた？

—4か月です。

—結構長いですね。

—帰宅困難区域の個展をしたときに、水俣フォーラムのスタッフが来てくれて、水俣の話を聞いて。行く前から水俣と福島の関係性を教えてもらって。それから、つなぎ美術館の楠本さんに勧められて、緒方正人さんの本は読んでいた。

—福島からつながっていった。

—福島みたいな規模で環境汚染があって、いまだに生きている人がいる。広島でもそれを感じたんですけど、教科書の歴史だと思っていたものが、地続きなんだなと。まあ、水俣の方が広島よりさらに年代が近いので、それなら会わないとな、と思って。実際に話を聞くと、皆さんすさまじい乗り越え方をしているので……。

—その体験から哲学が生まれてくる。

—そういうときも「絵画」と「生き延びる」という言葉を指針にして、今生きているぼくがかかわれるところ、飛躍しないというか……自分にできないことはしない。自分にできること、しかも絵画でできることというのが芯になっていたの、どこへ行っても、誰と会ってもぶれないというか……

—どうしてもテーマが強いと引ばられやすいですね。でも表現の意識はしっかりしていますね。

—自分自身のぶれない価値基準みたいなもの、これで絵が完成するという判断と、何を選ぶかという判断は、つながっているんですよ。自分が絵にできそうだな、自分の絵にまとめられそうだなということ以外は、できない。他の人がやった方がいいんだろうなと思う。だから広島では「原爆の絵」の模写はできそうだな、とか。水俣ではお地藏さんとの対話はできそうだな、とか。全部、人が作ったものなんです、実は。人に対してドキュメンタリっぽくコミットしていくのは苦手なんです。

—直接、人じゃなくて、人が残したものの。

—人が残したもののの方が、逆にじっくり物語ってくれるというか……



惑星としての土/復興としての土2 2023年 油彩、キャンバス 1940×1620mm

## 自分で作った土を画材に使って 除染された畑を描けないか

—なるほど、福島の絵もフェンスや畑ですね。

—そうなんです。畑とか杭。畑も人の痕跡ですからね。もちろん当事者の方とは話すんですけど。

—富岡町では小学校で滞在制作をしましたね。

—人を避けているわけではないんです。でも広島とか水俣みたいな膨大な歴史的なものがあって、自分が何にアプローチしていくかというときに、モノはやりやすいですよ。

—適度な距離を保てるんですかね。

—引ばられ過ぎないというか、こっちの解釈の余地が残っている。人の意志に引ばられ過ぎる

と、絵にしていくときに止まっちゃうんですね。

—「3.11」から福島に関心をもって作品を作り続けて、水戸美術館など発表の機会も増えてきたときに、コロナ禍の時間が新たな影響をもたらした。

—水戸美術館の展示のために福島の立入禁止区域の看板の絵を描いているときから、中間貯蔵施設に興味移っていたんですね。というのも、看板をスケッチしながら、その向こうではガンガン除染が進んでいて、土は移動され続けて、ダンプは前を通り続けて、これどこに行くんだろうなと思ったら、やっぱり中間貯蔵施設に行くわけで。取材に行こうと、ずっと思っていたんですよ。でもコロナ禍になって、見学ツアーも厳しくなつて。何もできないなかで、畑をはじめようと。



—自分の生活圏でできることを。

兄夫婦が借りていた土地をさらに間借りして。土をいじっていくなかで、自然農が面白そうだなとか。ぼくはどうせやるなら、コンポストトイレをやってみようと思って。畑の野菜にも撒けるし。その頃、子どものうんちの処理をずっとしていたんですけど、それを混ぜて分解して畑に撒けるんだったら一石二鳥だなと思って、最初は子ども用のコンポストトイレを作った。除染された畑を取材したのはその後なので、コンポストトイレの方が先なんです。畑を描こうと思ってコンポストをはじめたわけではないんです。

—畑が先なんです。それは2020年？

2021年2月くらいに畑をはじめて、2021年8月くらいにコンポストをはじめているんですね。で、2021年12月に、除染された場所を見つけている。—だんだんテーマが定まってきた。

そうなんです。知り合いの家の近くの畑で除染の話聞いて。はじめは運ばれた土を描こうと思ってはいたんですけど、削られた方に対してアプローチができないかなと。そのときに、あの土を使って絵が描けるんじゃないかと、畑やコンポストのことがつながっていったんです。それで帰ってきてコンポストで画材を作ろうと思って、どうせなら自分のうんちも使おうと思って、2022年はずっとそれをやっていたんですね。

—絵具にする土と畑に撒く土は分かれている？

生野菜用のコンポストも作っていて、作品にするときには自分のうんちだけの方が面白いなと思って、分けたんですね。畑に撒くのは基本的に野菜だけで、作品にすると決めてからは、うんちは絵に使うだけにして。

—最初からうまくいったんですか？

いや全然。失敗が多くて。ぼくはスケッチとかドローイングから描きはじめるので、そのための画材のパステルを作ってみたら、硬さが全然うまく行かなくて。

—ほどよく軟らかくないといけない。

分量の割合を見つけるまでがたいへんで、教則本もほとんどなくて。インターネットにひとつだけパステルを作るってページがあって、でも、あんまり詳しく書いてなかった。アラビアゴムとかムードンとか、いろいろ買っては試し……それで、ムードン仕上用がいちばん滑らかだった。

—それから油絵具も作った。

たいへんなのは細かくする作業で、機械を使おうと思えば使えたんですけど、手作業の蓄積みたいなイメージを勝手に作っちゃって。とりあえず今回は手作業でやろうと。ゴリゴリすって顔料を紙コップ1杯分作るのに半日くらいかかるんです。絵を描くのに紙コップ50杯分くらい必要なので、ひたすらそれだけをやっても1か月かかる。



## 1000年分の最初の土を撒く行為になるんじゃないかと思って

—それはたいへんなことですね。

白も作るの、その倍。だからこの絵は、ほとんどがすり潰している時間。

—描く時間より……

いや、まあ半々くらいですかね(笑)。あとは堆肥ができるまでの時間もあるので。

—でも、その時間に意味があった。

その時間も大事と思っていたんですけど(笑)。

フィジカルはもうポロポロになって。

—身体を痛める。

腰が痛くて。今でもまだ後遺症があって。

—たくさん作品は作れないですね。

そうなんです。次にこれをやるときは機械でやると思います。さすがにちょっともう無理。

—考えた方がいい(笑)。

女子美大に日本画の研究室があって、岩を砕ける機械があるらしいですよ。油絵科の講師でも頼めば使えるらしくて。でも、ぼくはそれを知りつつ、あえて使わず、自力でやっていたんです。

—その時間も絵にこめるということが大事なんですね。身をもってテーマと画材をつないでいる。

いま行われている福島を除染は、現地の方から聞いた話ですけど、表層の土を10cm削り取っ

て放射線を下げるとのことなんです。田んぼや畑にとっての表層10cmはすごく重要で、栄養素は表面にたまって、下はどちらかというと水分がたまる。だから表面が10cm削られると致命的で、田んぼや畑を再開するにしても、何年も育てて刈って堆肥にして、ということを繰り返して、最低でも5年くらいやらないと今まで通りの農作物は作れない。作ったとして線量的には多分問題ないと思うんですけど、田んぼは使っていないと法律的に農地として認められないから、今は田んぼに通って、育てて、刈って、倒すためにやっているんだという話を聞いて、すごい話だなと思って。ほかの資料を見ても、自然界の森の土は1cmたまるといって、100年かかるくらいのスパンで蓄積されているというので、10cm田んぼの土を削ることは、その土地の1000年の歴史を奪い取ることになるなと思って。除染というのは、そういうことなんだ、と。もちろん除染しないと何もはじまらない現実があるんですけど。今の除染とか復興って、土を削り取って、そこで終わりなんですよ。そうじゃなくて、そこから復興ということになるべきで、自分がちょっとですけど、この1年くらい畑をやってきたことを体感として、福島の景色のなかにコミットできれば、そこからはじまる1000年分の最初の土を撒く行為になるんじゃないかと思って。その畑に、自分の作ったフカフカの、新鮮な堆肥

を撒きに行っているくらいの気持ちで、画面に絵具を置いている。それが絵を観た人に伝播していったらいいなあと。

一なるほど。

農業の話なんですけど、福岡正信さんという自然農の創始者みたいな人が最終的に編みだした泥団子農法というのがあって。栄養のある泥に野菜の種を混ぜ込むんですよ。種のいっぱい入った泥団子をつくって、それを畑にランダムに投げるんです。それで発芽するタイミングが来たら、発芽する。発芽は種任せ。その人の畑はジャングルみたいですごいです。もちろんもう亡くなっているんですけど。その考え方をシードボムって呼んでいる人がいて。

一爆弾なんですね。

抗議デモの行為として、シードボムをいっぱい作って、福島第一原発に投げ込んできたという人たちがいて(笑)、すげえなと思ったんですけど。泥団子農法は発想としてはアフリカで農業を広めるために、それくらい適当でもできるということで生まれた方法らしいです。ぼくの行為も、土を作って投げていくみたいな、ポジティブな意味を込められたらな、と。

## 何があっても生き延びるために自分で作れるシステムを持ちたい

一そういうことを考えて描いている。

実際に直接土を投げている人もいるよ、という話ですね。ぼくはそこまで現実的にアクティビストではないので、画家なので、画面のなかで……

一福島とのつながりを絵にもたらし。

まずは、除染されたという現実に対して。でも、ぼくは削られた方の土にも興味があるから、それはどういうアプローチにしようか、まだ止まっています。中間貯蔵施設に行っていないので、それは行って見て考えようかなと思っています。でもその土が、最近、所沢に来るって言うんですよ(笑)。



1



2



3

一そうそう、ニュースになっていたね(笑)。

一実証実験として。すごくタイムリーで……

一取材に行きやすくなった。

一でも、すごくクローズドな施設なんです。記者会見も、所沢市民じゃなくて、その地区の住民50人限定でやって。

一それは地域を分断していく策略ですね。

一本丸は中間貯蔵施設なんですけどね。除染さ



4



5



6



7



8



9

惑星としての土／復興としての土のためのエスキース1～9 2023年 パステル、色鉛筆、和紙 450×310mm

れた土地に対するアクションとしては、自分なりに納得のいく絵を描けたかな。絵を描けたというか、そういう行為ができたかな、と。

一絵を描く以前も含めての作品ということですね。

一そうですね、生き延びるために。コロナ禍で畑をはじめた理由は、人が慌てると、あっという間にモノがなくなるし、こんなに日常でもろいんだ、と思って。食べられるものでも何でも、少しでも自

分で作れるつながりを持っておきたいと思って。子どももできたし、いま食べているもののパーセンテージで言うと3%とか2%くらいしかとれていないんですけど、それでもそのシステムを作りたい。自分の知っている福島の家の人話を聞いて、家を建てる木材は、小さい頃におじいちゃんが自分の土地に木を植えて、大きくなったら伐って使うという、かなり完結したシステムで生き



10



12

惑星としての土／復興としての土のためのエスキース10～13



11



13

2023年 油彩、キャンバス 530×455mm

ているんですね。米も自分たちが食べる米を基本的に作って、余ったものを農協におろす。牛も飼っていて、牛のうんちを畑に撒いたりとか。その家をこの前解体して、それはまた別のストーリーがあるので、絵にしたいんですけど。

一絵にする題材はいろいろありますね。

取材して、空き地もスケッチはしているんです。福島の人と話をしていると、当たり前のようにそういうことがあって、たくましいというか、もちろん過酷であるが故に知恵があるんだと思うんですが。そういうのも絵にしたいんですけど、この絵が時間かかりすぎて、たまっているんですよ(笑)。一先へ進めなくなった。

でも方法論としては、ひとつの武器になると思って。マテリアルから関係を作っていくというのは、今までしていなかった。手づくりの土以外でも、その土地の何かを顔料にしたものを絵に取り入れるのは、絵と社会との関係を作っていく上で、ダイレクトに意味が込められる。

一絵画の物質に社会との接点をもたせていく。

それだけではコンセプト過ぎると思うんですけど、うまい具合に混ぜれば、今後の方法として生かせるかなと思います。

一今後が楽しみです。ありがとうございました。

2023年1月16日、アトリエにて

聞き手:岡村幸宣

## 加茂 昂 かも あきら

1982 東京都出身  
2008 東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業  
2010 東京芸術大学大学院絵画研究科修了

### 個展

2020 富岡町とその光景の肖像(富岡町文化交流センター学びの森、福島)  
2019 境界線を吹き抜ける風 (LOKO gallery、東京)  
2018 追体験の光景(原爆の図丸木美術館、埼玉)  
2017 その光景の肖像(つなぎ美術館、熊本)  
2017 風景と肖像のあいだ (island japan、東京)  
2017 追体験の絵画(広島芸術センター、広島)  
2016 土に死を生ける(橘画廊、東京)  
2016 逆聖地(橘画廊、東京)  
2012 【絵画】と【生き延びる】(island MEDIUM、東京)

### グループ展

2022 ヴォイドオブニッポン 戦後美術史のある風景と反復運動 (GYREギャラリー、東京)  
2022 世界の終わりと環境世界 (GYREギャラリー、東京)  
2021 3,11とアーティスト 10年目の想像(水戸芸術館、茨城)  
2021 もやい展(タワーホール船堀、東京)  
2020 ドローイング展 (LOKO gallery、東京)  
2020 一枚の絵の力 (PROJECT 501、東京) / ON LINE(oil.bijuthutetho.com)  
2020 国立奥多摩湖 ～もちつもたれつ奥多摩コイン～ (galleryaM、東京)  
2019 立ち上がりの技術vol.4「レコメン堂」(東北リサーチとアートセンター、宮城)  
2019 あざみ野コンテンポラリーvol.10しかくのなかのリアリティー(横浜市民ギャラリーあざみ野、神奈川)  
2019 「絵画」(SNOW Contemporary、東京)  
2019 星座を想像するように一過去、現在、未来(東京都美術館、上野)  
2016 対馬アートファンタジア2016(対馬各所、長崎)  
2015 航行と軌跡(国際芸術センター青森、青森)  
2015 対馬アートファンタジア2015(対馬各所、長崎)  
2015 VOCA展2015(上野の森美術館、東京)  
2014 トランスアートトーキョー2014(旧電機大学、東京)  
2014 対馬アートファンタジア2014(対馬各所、長崎)  
2014 Wall Art Festival 2014 (India、インド)  
2013 「醤油倉庫レジデンスプロジェクト春会期」瀬戸内国際芸術祭2013(小豆島、香川)  
2013 VOCA展2013(上野の森美術館、東京)  
2013 メメント・モリ～愛と死を見つめて～(ARATANIURANO、東京)  
2013 超たまたま(シャトー2F、東京)  
2012 SHARE (BOX KIOKU、東京)  
2012 パラレルウェーブ (RED ELATION GALLERY、香港)  
2012 一枚の絵の力(ナディッフギャラリー、東京)  
2011 GOD HAND (三井ガーデンホテル柏2F、千葉)  
2011 一枚の絵の力(3331 Arts Chiyoda/1Fメインギャラリー、東京)  
2011 vromancer (island MEDIUM、東京)  
2010 RAKURAKU FESTIVAL (GALLERY RAKU、京都)  
2010 ART FAUR FREE (VACANT、東京)  
2009 アートラインかしわ2009 千葉 わくわく JOBAN-KASHIWA PROJECT (柏市内、千葉)  
2009 大地の芸術祭 越後妻有 art triennial2009克雪ダイナモアートプロジェクト(仙田小学校、新潟)  
2009 別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」わくわく混浴アパートメント(清島アパート、大分)  
2009 FRESH (R2、千葉)